慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「積翠寺蔵和漢聯句「心もて」注釈」訂正
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2020
Jtitle	三田國文 No.65 (2020. 12)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20201200-0266

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

拙稿「積翠寺蔵和漢聯句「心もて」注釈」について、以下のように、発句の解釈を改めます（このこと、尾崎千佳氏御教示）。

……

1心もて染ずばちらじ小萩原　　晴信

〔式目〕秋（小萩）　植物草（小萩）　④原1

〔語釈〕○心もて　自分から、ひとりでに。「心もて散らんだにこそ惜しからめなどか紅葉に風の吹くらん」（拾遺集・秋・二〇九、貫之）。○染ずばちらじ　「心もて染まずば、心もて散らじ」の意。藻塩草八・二十二・萩「いろどる風〈萩を云ふ也〉」とあるように、萩は風で色づくとされた。敢えて、その「風」を省けば、何か別の理由で色づいた、と導かれるわけで、そこに実澄一行の歓迎の意を込めたものか。○小萩原　小萩の咲く野原。小萩は初秋、紅葉よりも先に咲いて散る。「ちりにけり鹿なく野辺の小萩原下葉の色ももみぢあへぬに」（続千載集・秋上・四二二、亀山院）。

〔句意〕自分から色づかないのであれば自分からは花は散るまい、この小萩の原では。―あなたがたを歓迎してこそ色づくのだから、散ることはありますまいよ。